

## 乳児期の情動制御の発達に関する基礎的研究 — 家庭における子どもの観察と質問紙評定による母親変数の縦断的検討 —

The Development of Emotion Regulation in Infancy

星 信 子  
Nobuko HOSHI

### はじめに

子どもの情動制御の発達についての研究はこの数十年間で増加してきており、その結果、情動制御が子どもの適応行動の中核をなす重要なものと見なされるようになってきた (Bridges & Grolnick, 1995; Saani, 1999; Kopp, 1982)。子どもの情動制御行動には非常に大きな個人差があるとされている。その個人差は、例えば、子どもの気質などの子ども側の要因の影響を受けると考えられているが (Rothbart & Bates, 1998)、その実際のプロセスについてはまだ研究例も少なく、明らかになっていない部分も多い (Eisenbergら, 2003)。

子どもの情動制御の発達は、また、養育者から様々な影響を受ける。例えば、親の情動表出傾向や家庭の情動的雰囲気、子どもの否定的情動に対する親の反応などが影響を与えていることが報告されている (Eisenbergら, 1999; Denham, 1997; Garner & Power, 1996)。しかし、このような研究にも関わらず、現在でも子どもの情動制御発達に親の行動が影響を与えるメカニズムについては、やはりまだ明らかにされない部分が多い (Eisenbergら, 2003; Collinsら, 2000など)。

その中で、子どもの情動制御行動に影響を与えている要因の一つとして最近注目されている要因の1つに、メタエモーションがある。メタエモーションはGottmanらが提唱した概念で、自分自身の情動と子どもの情動についての感情と思考が構造化されたものである (Gottmanら, 1997; Gottmanら, 1996; Hoovenら, 1995)。メタエモーションは、単なる情動についての情動ではなく、情動と思考の両者、また情動の実行機能を含むものであり、情動に対する気付き (awareness) と指導 (coaching) という2次元からなっている。具体的には、子どもの情動に気付き、それを認め、ラベル付けし、対処の仕方を教えるというような一連の内容を含み、親の養育行動だけではなく、子どもの情動制御行動、さらに子どもの後の対人関係や学校の成績などに影響を与えるとされている。日本においては、新美と内山が一連の研究において母親のメタエモーションが子どもの自己制御行動や共感性に与える影響について検討を行ってきているが (新美・内山, 1998; 2000a; 2000b; 2000c)、その他にはまだ研究例が少なく、さらに研究が必要である (星ら, 2002)。

本研究は、乳児の否定的情動の表出傾向やその制御を実際に家庭で縦断的に観察し、その関係を検討すること、また、母親の子どもに対する見方や、母親自身の行動特徴についての捉え方、さらに母親のメタエモーションを測定し、母親の見方や態度と子どもの情動制御との関係を検討することにより、乳児期の情動制御発達に関する基礎的なデータを提供することを目的としている。

## 方 法

### 1. 被験者

札幌市内に在住する母子29組が、子どもが約4ヶ月の時の初回質問紙調査から約1歳半の時の第2回家庭観察までの縦断的調査に参加した。子どもの性別は、男児15名・女児14名、出生順位は、第一子が21名、第二子が6名、第三子と第四子がそれぞれ1名ずつであり、出生時から観察の実施までの間に特に発達的問題がみられた子どもはなかった。

### 2. 手続き

#### (1) 全体の計画

初回質問紙は札幌市内の保健センターで実施された4か月健診の際に会場で配布して協力を依頼し、協力可能な場合のみ郵送にて回収した。その際に以後の家庭観察への協力を了承した母子が今回の観察に参加した。

研究は、2回の家庭観察と2回の質問紙調査からなる。子どもが3ヶ月～5ヶ月（以下4ヶ月と略す）の時に第1回質問紙調査、6ヶ月～8ヶ月（以下6ヶ月と略す）の時に第1回家庭観察、18ヶ月～21ヶ月（以下18ヶ月と略す）の時に第2回家庭観察および第2回質問紙調査を実施した。

#### (2) 家庭観察

家庭には保育士及び幼稚園教諭経験者である観察者とビデオ撮影者、及び観察対象児にきょうだいがいる場合はベビーシッター（全員が女性）が訪問した。観察では、子どもの怒り・恐れ・快の情動表出傾向及び情動制御、また子どもの注意の特徴等に関する半統制的場面を実施した。全体の実施時間は説明等を含めて約1時間半であった。今回の報告ではそのうち怒りの情動喚起場면을対象とする。

子どもの怒りの観察：Goldsmithらの開発した実験室気質測定手続きを参考にし、腕の拘束場面とバリア場面により、怒りの表出傾向と制御について観察した。腕の拘束場面は、子どもが椅子に座り玩具で遊んでいる途中で母親が後ろから子どもの腕を拘束するもので、2試行を連続して実施した。バリア場面は子どもが遊んでいる玩具を透明なアクリル板のバリアの向こう側に置いて取れないようにするもので、3試行を連続して実施した。いずれの場面も刺激提示時（腕の拘束中及びバリアの提示時）及び刺激提示終了後一定時間の子どもの様子をVTRに録画した。

### (3) 質問紙

実施質問紙は、初回にRothbartらの開発した乳児用気質質問紙、Infant Behavior Questionnaire (以下IBQと略す)、母親の養育に関する質問紙(この中にメタエモーション質問紙を含む)、第二回家庭観察時にGoldsmithによる幼児用行動質問紙Toddler Behavior Assessment Questionnaire (以下TBAQと略す)、及びRothbartらの開発した成人用気質質問紙Adult Temperament Questionnaire (母親が自分自身を評定:以下ATQと略す)の4つであり、全て母親に評定を依頼した。IBQ、TBAQ、ATQはいずれもRothbartらの気質理論を基礎にして作成されており、縦断的に使用して同様な次元を測定することができるものである。

IBQの項目数は94項目であり、「活動性」「快」「新奇刺激へのディストレス(恐れ)」「制限に対するディストレス(怒り)」「なだめやすさ」「定位の持続(興味)」の6尺度を評定する。評定方法は特定の状況における子どもの具体的な行動に対して、最近1週間以内の実際の子どもの行動との当てはまりの程度を7点尺度(全くあてはまらない～全くそのとおり)で評定する。もし、子どもが質問にあるような状況を経験していない場合は、「どれでもない」を選択するが、その場合は欠損値として扱う。

TBAQの項目数は111項目であり、「活動性」「快」「恐れ(対人のみ)」「怒り」「興味」の5尺度を評定する。評定方法は特定の状況における子どもの具体的な行動に対して、最近1ヶ月以内の実際の子どもの行動との当てはまりの程度を7点尺度(全くあてはまらない～全くそのとおり)で評定する。もし、子どもが質問にあるような状況を経験していない場合は、「どれでもない」を選択するが、その場合は欠損値として扱う。

ATQは自己報告式の成人用気質質問紙である。ショートとロングの2タイプがあるが今回はショートタイプを使用した。ショートタイプの項目数は77項目であり、「否定的情動」「努力による制御」「外向性」「定位の敏感さ」の4次元を測定するが、それぞれに、「恐れ」「不快」「抑制的制御」「注意の制御」「情動的知覚の敏感さ」などの下位次元をもつ。評定方法は、人の特徴をあらわす文章に対する当てはまりの程度を7点尺度(全くあてはまらない～全くそのとおり)で評定する。もし、質問にあるような状況を経験していない場合は、「どれでもない」を選択するが、その場合は欠損値として扱う。

母親のメタエモーションの測定質問紙は、Gottmanら(1997)、新美、内山(1998, 2000a, 2000b)などを参考にして作成した。Gottmanらは、「悲しみ」「怒り」「恐れ」の情動についてのメタエモーションを面接により測定し、新美らはその3情動にさらに「喜び」を加えた質問紙を作成しているが、本研究では「怒り」のみを扱った。

質問紙では、まず初めに母親自身が「怒り」を覚えた経験を簡単に自由記述させ、その後「怒り」の経験の想起しやすさ、自分自身の「怒り」への気付きやすさ、自分自身の「怒り」のコントロールなどに関する7項目について5点尺度で評定させた。次に子どもが「怒り」を表出した経験について簡単に自由記述させ、その後子どもの「怒り」経験の想起のしやすさ、

子どもの「怒り」への気付きやすさ、子どもの「怒り」への対処などに関する8項目について母親自身の項目と同様5点尺度で評定させた。

### 3. 分析

#### (1) 家庭観察

場面中にみられた否定的情動表出について、表情・発声・身体的表出の3つを評定した。評定は、被験者の1割を無作為に抽出して評定し、全ての変数に対する一致度が8割を超えるまで訓練した3名の評定者がビデオテープの再生により実施した。

表情と発声については、刺激提示中から刺激提示終了後10秒間までを、1秒ごとに、強い表出有り(2点)、表出有り(1点)、表出無し(0点)の3段階で評定し、各試行ごとに刺激提示中と刺激提示後の平均値および最大値を算出した。また、刺激提示時には、初めて表出がみられた時、及び最も強い表出が初めて見られたときまでの経過時間(秒)を算出し、それぞれの逆数を表出までの潜時、及びピークまでの潜時とした。刺激提示終了後には、初めて表出が弱まってくるまで、及び表出が初めて見られなくなるまでの経過時間(秒)を算出し、それぞれ制御開始までの潜時、及び制御までの潜時とした。また、表出の持続時間を算出した。

身体的表出については、当該場面のターゲットとなる情動(例えば、「怒り」等)の表出とみられる行動(例えば、バリアをたたく等)の有無を1秒ごとに評定し、全ての身体的表出の持続時間を算出した。

評定の結果、バリア場面については、6ヶ月観察の際にはっきりとした数秒以上続く否定的情動を表出した子どもがほとんどおらず、この月齢での怒りの喚起場面として適切ではなかったと判断されたため以降の分析からはずした。

統計処理の前に、全ての変数を標準化した。各試行を刺激提示中及び刺激提示後に分け、2つ以上の変数間で有意な正の内部相関が見られない変数を除いた全ての変数についての標準得点の平均値を、試行ごとの刺激提示中及び刺激提示後の得点とした。さらに1場面の全試行の得点の平均値を算出し、刺激提示中の得点を怒りの得点とした。また、刺激提示中の得点から刺激提示後の得点をひいたものを制御の得点とした。

#### (2) 質問紙

IBQ, TBAQ, ATQに関しては、それぞれの尺度を測定する各項目得点の単純平均を算出し、尺度の得点とした。

メタエモーション質問紙に関しては、我々が収集した本質問紙に対する0才から6才までの日本の母親の大規模なデータから、母親の自分自身の怒りのメタエモーションに関しては、「怒りの想起」、「怒りのコントロール」、「怒りへの気づき」の3つの因子が抽出されたことから、これらの3因子に大きな負荷を持つ質問項目の回答の平均値を算出し、それぞれの次元の得点とした。子どもの怒りについては、ほとんどの母親が子どもの月齢が低いためはっきりとした子どもの怒りの体験を記述できないと回答したため、以下の分析からはずした。

## 結 果

### 1. 家庭観察での怒りの情動性とその制御

「怒り」の情動性とその制御の関係について表1に示す。

表1 「怒り」の表出と制御(家庭観察)

		6ヶ月			18ヶ月	
		怒り	怒り(事後)	制御	怒り	怒り(事後)
6ヶ月	怒り(事後)	.68** (27)				
	制御	.42** (27)	-.38* (27)			
18ヶ月	怒り	.27 (22)	.54* (22)	-.21 (22)		
	怒り(事後)	.01 (22)	.27 (22)	-.25 (22)	.62** (24)	
	制御	.28 (22)	.28 (22)	.05 (22)	.46* (24)	-.42* (24)

注：上段はpearson相関係数 \*\*：p<.01, \*：p<.05, 下段は人数

6ヶ月でも18ヶ月でも、刺激に対する「怒り」の情動性と刺激提示後に残った「怒り」の情動性、またその制御との間に有意な正の相関がみられた(6ヶ月：「怒り」\*「怒り(事後)」：r=.68, p<.01, 「怒り」\*「制御」：r=.42, p<.05。18ヶ月：「怒り」\*「怒り(事後)」：r=.62, p<.01, 「怒り」\*「制御」：r=.46, p<.05)。すなわち、刺激に対して喚起された怒りが強いほど刺激提示が終了した後に残っている怒りは強いが、刺激提示中から刺激提示後への怒りの減少の幅も大きく、怒りが弱い場合は、刺激提示終了後の怒りも弱い、刺激提示中から提示後への減少の幅も小さかった。

また、6ヶ月と18ヶ月の「怒り」の情動性や制御の特徴の安定性についてであるが、刺激に対する「怒り」の情動性そのものには有意な関係はみられなかったが、6ヶ月での刺激提示後に残っている「怒り」の情動性と18ヶ月での「怒り」の情動性との間に有意な正の相関がみられた(r=.54, p<.05)。

### 2. 質問紙評定による子どもと母親の行動特徴の関係

#### (1) 子どもの行動特徴

4ヶ月の子どもの行動特徴に対する母親の評定を表2に示す。

表2によれば、4ヶ月の子どもの行動特徴に対する母親評定の結果、「快」と「定意の持続」、また「なだめやすさ」との間に有意な正の相関、「制限に対するディストレス」と「なだめや

表2 母親評定による4ヶ月の子どもの行動特徴

	活動性	制限への ディストレス	新奇刺激への ディストレス	定位の持続	快
制限へのディストレス	.03 (29)				
新奇刺激へのディストレス	.36 (29)	.14 (29)			
定位の持続	.19 (29)	-.07 (29)	.21 (29)		
快	.35 (29)	-.22 (29)	.15 (29)	.38*	
なだめやすさ	.06 (29)	-.48** (29)	-.04 (29)	.23 (29)	.37* (29)

注：上段はpearson相関係数 \*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$ , 下段は人数

すさ」の間に有意な負の相関がみられた（「快」 \* 「定位の持続」 :  $r = .38$ ,  $p < .05$ , 「快」 \* 「なだめやすさ」 :  $r = .37$ ,  $p < .05$ , 「制限に対するディストレス」 \* 「なだめやすさ」 :  $r = -.48$ ,  $p < .01$ ）。すなわち、乳児期のごく初期では、母親は快の表出が多いと感じている子どもほど注意の持続が長く、またなだめやすいと評定し、また制限に対してディストレスを強く表す子どもほどなだめにくいと評定している。

18ヶ月の子どもの行動特徴に対する母親の評定を表3に示す。

表3 母親評定による18ヶ月の子どもの行動特徴

	活動性	快	恐れ	興味
快	.04 (24)			
恐れ	.34 (24)	.18 (24)		
興味	-.01 (24)	.30 (24)	.16 (24)	
怒り	.57** (24)	.03 (24)	.47* (24)	-.17 (24)

注：上段はpearson相関係数 \*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$ , 下段は人数

表3によれば、18ヶ月の子どもの行動特徴に対する母親評定の結果、「怒り」と「活動性」及び「恐れ」との間に有意な正の相関がみられた（「怒り」 \* 「活動性」 :  $r = .57$ ,  $p < .01$ ,

「怒り」\*「恐れ」： $r=.47, p<.05$ 。すなわち、乳児期後半では、母親は子どもの怒りの傾向が強いと感じている場合には活動性も高く、また恐れも強いと評定しているのである。

次に、4ヶ月と18ヶ月の行動特徴の安定性について意味のある関係性が認められたのは快の表出傾向のみで、有意な正の相関がみられた（「快（4ヶ月）」\*「快（18ヶ月）」： $r=.44, p<.01$ ）。その他に、4ヶ月の「快」と18ヶ月の「恐れ」との間に有意な正の相関がみられた。

## (2) 母親の行動特徴と怒りのメタエモーション

母親の行動特徴の自己評定と、怒りのメタエモーションの関係を表4に示す。

表4 母親の怒りのメタエモーションと自分自身の行動特徴との関係

	行動特徴			
	否定的情動	努力による制御	外向性	定位の敏感さ
メタエモーション 怒りの想起	.06 (22)	-.00 (22)	-.11 (22)	.23 (22)
怒りのコントロール	.17 (22)	-.40 (22)	.04 (22)	-.42* (22)
怒りへの気づき	-.51* (22)	.21 (22)	.36 (22)	.22 (22)

注：上段はpearson相関係数 \*\*： $p<.01$ , \*： $p<.05$ , 下段は人数

表4によれば、母親の行動特徴とメタエモーションの関係として、「否定的情動性」と「怒りへの気づき」との間、及び「定位の敏感さ」と「怒りのコントロール」との間に有意な負の相関がみられ、「努力による制御」と「怒りのコントロール」との間に負の相関の傾向がみられた（「否定的情動性」\*「怒りへの気づき」： $r=-.51, p<.05$ 、「定位の敏感さ」\*「怒りのコントロール」： $r=-.42, p<.06$ 、「努力による制御」\*「怒りのコントロール」： $r=-.40, p<.10$ ）。すなわち、母親は自分自身の否定的情動性が強いと感じている場合、自分の怒りに気づいたり、怒りを他の感情から区別しづらく、行動制御がうまくいかない場合と感じている場合や、様々な刺激に対する敏感性が低い場合は怒りのコントロールがうまくいっていないと感じている。

## (3) 子どもの行動特徴と母親の特徴との関係

18ヶ月の子どもの行動特徴と子どもが4ヶ月時の母親の怒りのメタエモーションの関係について、表5に示す。

表5によれば、母親の「怒りの想起」と後の子どもの「快」との間に有意な正の相関がみられ、また母親の「怒りへの気づき」と後の子どもの「怒り」との間に有意な負の相関がみられた（「怒りの想起（母）」\*「快（子ども：18ヶ月）」： $r=.49, p<.05$ 、「怒りへの気づき（母）」\*「怒り（子ども：18ヶ月）」： $r=-.47, p<.05$ ）。すなわち、母親が怒り体験を想起しやすと感じている場合、後に子どもの快の表出傾向を強く評定する傾向があり、また母親が怒り

表5 母親のメタエモーションと18ヶ月の子どもの行動特徴の評定との関係

		子どもの行動特徴				
		活動性	快	恐れ	興味	怒り
メタエモーション	怒りの想起	.38 (22)	.49* (22)	-.29 (22)	.18 (22)	-.17 (22)
	怒りのコントロール	.06 (22)	-.26 (22)	-.14 (22)	-.15 (22)	.08 (22)
	怒りへの気づき	.04 (22)	.05 (22)	-.24 (22)	.03 (22)	-.47* (22)

注：上段はpearson相関係数 \*\*：p<.01, \*：p<.05, 下段は人数

をコントロールできていないと感じている場合、後の子どもの怒りの表出傾向を強く評定する傾向がみられる。4ヶ月の子どもの行動特徴と、母親の怒りのメタエモーションの間には意味のある有意な関係はみられなかった。

また、母親自身の行動特徴と子どもの行動特徴の評定との関係では、母親の「定位の敏感さ」と4ヶ月の子どもの「定位の持続」、また18ヶ月の子どもの「快」の表出傾向の間に有意な正の相関などがみられた（「定位の敏感さ（母）」\*「定位の持続（子ども）」： $r=.43$ ,  $p<.05$ , 「定位の敏感さ（母）」\*「快（子ども：18ヶ月）」： $r=.56$ ,  $p<.05$ ）。すなわち、母親の刺激に対する敏感さと子どもの特徴の評定の間に関連性があることが認められた。

### 3. 家庭観察でみられた怒りと母親評定の関係

家庭観察での怒りの表出やその制御の得点と、質問紙で母親が評定した子どもの行動特徴との間に有意な関係はみられなかった。また、母親自身の行動特徴との間でも同様に有意な相関はみられなかった。しかし、母親のメタエモーションとの関係では、6ヶ月の「怒り（事後）」と母親の「想起のしやすさ」との間に有意な正の相関がみられた（「怒り（持続）」\*「想起のしやすさ」： $r=.44$ ,  $p<.05$ ）。すなわち、刺激提示後もさらに怒りの表出が強く残っている子どもをもつ母親ほど、自分自身が怒りの体験を想起しやすいと感じているのである。

## 考 察

本研究の結果によると、乳児期においては、観察された怒りの情動表出傾向の大きさとその制御の特徴の間に次のような関連がみられた。それは、喚起された怒りの表出傾向が強いほど刺激の提示が終了した後も怒りが強く残る傾向があるが、刺激提示中と提示後の怒りの表出傾向の差（すなわち制御の大きさ）も大きい、また、刺激に対する怒りの表出傾向が弱い場合は、刺激提示後まで残っている怒りの表出傾向は弱い、制御の幅も小さいというものである。すなわち刺激に対して強く怒りを表出する子どもはその制御の幅も大きいという結果であり、基本的には乳児であっても、自分の怒りの表出の大きさにうまく対処することができる傾向を持つ



ているものと考えられる。しかし結果ではふれなかったが、なかには強い怒りを表出しながら制御がうまく行われぬ子どもも数名おり、このような子ども達は日常生活に困難を抱えている可能性があると考えられる。

また、怒りの特徴やその制御の特徴の安定性については、観察された怒りの情動表出傾向そのものに6ヶ月から1歳半にかけての安定性がみられなかったものの、6ヶ月の時に刺激提示後も強い怒りの表出傾向を示す子どもの方が、1歳半の時に刺激提示時の怒りの表出傾向が強いという結果が得られた。子どもが0歳代前半の時には、親は、まだ子どもが自分で否定的情動の表出をコントロールすることを期待していないが、0歳代後半からは少しずつ自分でも否定的情動を制御することを要求するようになってくる。本研究の結果は、0才の時に怒りが長引かない特徴を持つ子どもは、怒りの制御をうまく行う可能性を持っており、社会化を通して怒りの表出そのものをうまくおさえることを学んでいっていることを示唆するのかもしれない。

次に、質問紙で評定された子どもの情動表出傾向の4ヶ月から1歳半にかけての安定性についてであるが、快に関しては有意な安定性がみられたものの、怒りや恐れについての安定性はみられなかった。これまでに報告されている情動表出傾向の安定性は研究により一定しておらず、高いものから低いものまで様々である(例えば、Rothbart & Bates, 1998)。特に、一般的には乳児期初期に示される行動特徴のうち後まで高い安定性を示すものはそう多くはなく、本研究の結果も先行研究と同様の結果であると考えられる。

また、先行研究では、実際の観察によると子どもの情動表出傾向は情動ごとに独立であるとする結果が得られているが(例えば、星ら, 1997等)、質問紙で母親等に評定させた場合に複数の次元間に関連性が報告される場合が多い。本研究でも母親の評定した子どもの行動特徴には多くの次元間の関連がみられており、例えば、4ヶ月時に上手に刺激に注意を向けることができる子どもは快の表出も強いと評定され、制限に対して否定的情動の表出傾向が強い子どもがなだめにくいと評定されている。このような結果は、いわゆる「扱いやすさ」というような軸で母親が子どもを捉えていることを示唆するものであると考えられる。

母親の子どもに対する評定や母親自身の行動特徴と、母親の怒りのメタエモーションの間にもいくつかの関連性がみられた。例えば、母親自身の定位の敏感さが低い場合や努力による制御が弱い場合、自分自身の怒りのコントロールがうまくいっていないと捉える傾向がある、また、子どもの怒りの表出傾向が強いと捉えている場合、自分の怒りに敏感に気づかなかったり、自分の怒りを他の感情からうまく区別できないと感じているなどの結果が得られた。本研究では、これらの関連性について因果関係の方向性については検討できなかったが、これらの結果は、おそらく子どもとのやりとり(とその中で形成される子どもの見方)や自分の性格特徴に対する捉えなどが母親のメタエモーションの形成に影響し、それがさらに子どもとの相互作用の中で補強されていく可能性を示唆するものであると考えられる。

さらに、質問紙で測定された子どもの行動特徴に対する母親評定や、母親自身の行動特徴、

メタエモーションのうち、実際に観察された子どもの怒りの情動表出傾向やその制御の特徴と関連がみられたのは、母親の怒りのメタエモーションのみであった。先行研究でも子どもの怒りの情動表出傾向を観察と質問紙によって評定した場合、その一貫性があまり高くはないことが報告されることは多くみられ、乳児期においては負の関係すら報告されている場合もある (Rothbartら, 2000)。本研究の結果も同様であり、観察と質問紙評定との一貫性の低さに関しては今後さらに検討し、子どもの情動表出傾向をよりよく捉える方法を考えて行かなくてはならない。しかし、そういったなかで、母親の怒りのメタエモーションと子どもの怒りの制御の特徴との間に関連がみられたという結果は、子どもの情動制御の発達に対する母親のメタエモーションの影響の重要性を示唆するものであると考えられる。

本研究では、全体的にみて、母親の行動特徴や子どもの情動表出傾向に対する母親の見方などが、子どもの情動制御行動の発達に直接的に大きな影響を与えているという結果は得られなかった。しかし、母親が子どもの情動表出傾向や自分自身の行動特徴のとらえ方などに関連する、全体として一貫性のあるメタエモーションを形成している可能性が示唆されたこと、そういった母親のメタエモーションと子どもの情動制御との間に意味のある関連性がみられたことは、母親の子どもや情動に関する考え方や態度などが子どもの情動制御の発達に影響を与えている可能性を示唆するものと考えられる。おそらくは、これらの母親の考え方・見方は日常生活の中で子どもとの交渉の際に表される、母親の態度や手段を媒介として子どもの情動制御発達に影響を与えるのであろう。今後は、日常生活場面での子どもの否定的な情動表出とその制御の際の母子の実際の交渉などを、あまり間隔をあげずに縦断的に観察していくことによって、子どもの情動制御の発達に与える母親変数の影響についてさらに検討していきたい。

## 付 記

本研究は、平成14年度北海道浅井学園大学短期大学部特別研究費の助成を受けた。

## 引 用 文 献

- Bridges, L. J., & Grolnick, W. S. (1995). The Development of emotional self-regulation in infancy and early childhood. In N. Eisenberg (Ed.), *Review of personality and psychology: Vol. 15. Social development* (pp.185-211). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Collins, W. A., Maccoby, E. E., Steinberg, L., Hetherington, E. M., & Bornstein, M. H. (2000). Contemporary research on parenting: The case for nature and nurture. *American psychologist*, 55, 218-232.
- Denham, S. A., Mitchell-Copeland, J., Sternberg, K., Auerbach, S., & Blair, K. (1997)

- . Parental contributions to preschoolers' emotional competence: Direct and indirect effects. *Motivation and Emotion*, 21, 1, 65-85.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Shepard, S. T., Guthrie, I. K., Murphy, B., & Reiser, M. (1999). Parental reactions to children's negative emotions: Longitudinal relations to quality of children's social functioning. *Child Development*, 70, 2, 513-534.
- Eisenberg, N., Valiente, C., Morris, A. S., Fabes, R. A., Cumberland, A. J., Reiser, M., Gershoff, E. T., Shepard, & S. T., Losoya, S. (2003). Longitudinal relations among parental emotional expressivity, children's regulation, and quality of socioemotional functioning. *Developmental Psychology*, 39, 1, 3-19.
- Gottman, J. M., Katz, L. F., & Hooven, C. (1997). *Meta-Emotion. How Families Communicate Emotionality*. New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Gottman, J. M., Katz, L. F., & Hooven, C. (1996). Parental meta-emotion philosophy and the emotional life of families: Theoretical models and preliminary data. *Journal of Family Psychology*, 10, 3, 243-368.
- Garner, P. W., & Power, T. G. (1996). Preschoolers' emotional control in the disappointment paradigm and its relation to temperament, emotional knowledge, and family expressiveness. *Child Development*, 67, 1406-119.
- Hooven, C., Gottman, J. M., & Katz, L. F. (1995). Parental meta-emotion structure predicts family and child outcomes. *Cognition and Emotion*, 9 (2/3), 229-264.
- 星信子, 白佐俊憲, 陳省仁 (2002). 母親のメタエモーションと情動制御及び子どもの行動特徴との関連について. 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要, 40, 169-178.
- 星信子, 草薙恵美子, 陳省仁 (1997). 乳児の気質的特徴としての情動表出におけるスタイルは存在するか—実験室気質測定による検討—. 教育心理学研究, 第45巻, 第1号, pp.96-104.
- Kopp, C. B. (1982). Antecedents of self-regulation: A developmental perspective. *Developmental Psychology*, 18, 199-204.
- 新美暁子, 内山伊知郎 (1998). 家族の情緒的雰囲気がか子どもの自己制御行動に及ぼす影響—家族環境尺度とメタエモーション—. 日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 357.
- 新美暁子, 内山伊知郎 (2000a). 母親のメタエモーションがか子どもの自己制御行動に及ぼす影響. 日本発達心理学会第11回大会論文集, 384.
- 新美暁子, 内山伊知郎 (2000b). 母親のメタエモーションがか子どもの共感性に及ぼす影響. 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 556.
- 新美暁子, 内山伊知郎 (2000c). 子どもの自己制御行動に及ぼす母親のメタエモーションの影響. 日本心理学会第64回大会発表論文集, 1045.

- Rothbart, M. K., & Bates, J. E. (1998) . Temperament. In W. Damon (Series Ed.) & N. Eisenberg (Vol. Ed.) , *Handbook of child psychology; Vol. 3. Social, emotional, and personality development (5th ed., pp.105-176)* . New York: Wiley.
- Rothbart, M. K., Derryberry, D., & Hershey, K. (2000) . Stability of Temperament in Childhood: Laboratory Infant Assessment to Parent Report at Seven years. In V. J. Molfese, & D. L. Molfese Eds., *Temperament and personality development across the life span*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Saani, C. (1999) . *The development of emotional competence*. New York: Guilford Press.